

[巻頭随想]

野生ブドウとの出会い

松井弘之

大阪府立大学の果樹学研究室では、毎年6月下旬に大学院生及び4年生の歓迎会を兼ねて白山国立公園内にあるワンダーフォーゲル部所有の山小屋に2・3日行くのが毎年の行事であった。いくら騒いでも苦情のこない山の中の一軒家、解放感も手伝って夜遅くまでランプの下で酒を飲み、歌を歌い、お喋りするのが通例であった。また、翌日は二日酔いにもかかわらず全員で白山の隣に位置する大日岳(1709m)に半強制的に登らされるのが伝統的習慣となっていた。その日、大学院生の最古参である小生は、既に何回も登頂していたのであまり興味もなく、また飲み過ぎでムカムカしていたこともあって、途中でクマザサの中に隠れて休憩していた。ふと見上げると開花間もない幼果が着生しているブドウの蔓があった。そのブドウは樹勢が強く、葉は大きく円形または心臓型で裏面は茶褐色の密毛に覆われていた。浅学非才な小生は、誰かがここでキャンベル・アーリーを食べ、その折に捨てた種からの実生であろうと思っていた。翌日、桧峠(960m)にある小屋の辺りを散策すると、樹勢は弱い、葉は三角形から卵形で無毛、葉脈が浮き出ている、小さな房にはまばらに着粒しているブドウがあちこちにあった。さらに、越美南線の北濃駅(320m)近くを流れる長良川の堤防に、葉の裂刻は浅く、裏面は茶色の密毛で覆われ、房は非常に小さく、しかも匍匐性のブドウが多数自生していた。何となく気になったので後日、図書館で調べたところ、それらはヤマブドウ、サンカクヅル、エビヅルであること、同時にわが国のみならず東アジアには、多くの野生ブドウが自生していることが分かった。その時、はっと脳裏にひらめいたのは、「アメリカやヨーロッパの野生ブドウが栽培種として発展したにもかかわらず日本あるいは東アジアに自生している野生ブドウがどうして有

効利用されなかったのか」であった。助手に任官された後、「日本あるいは東アジア原産野生ブドウには栽培に利用できる優良形質がないのか？」を生理・生態的に明らかにするため、研究室一丸となって、日本各地さらに東アジアの野生ブドウの探索・収集を開始した。当時は資源植物の重要性が認識され始めたころであり、科学研究費の申請をすると必ず採択された時期でもあり、この点では幸運であった。この間、北は北海道から南は沖縄の石垣島に至るまで、海外では韓国、中国、台湾に自生している野生ブドウを採取するとともに、一部は研究圃場に栽植・育成した。また、各大学に所蔵されている標本を調査し、日本における野生ブドウの分布図を作成した。さらに、これらの資料から日本には7種8変種が自生し、東アジアの自生種と共通している種も多いことが確認され、また韓国光州市近郊の山麓で新種も発見した。一方、圃場で生育したこれらの野生ブドウについて、生理・生態的特性を調査した結果、育種的に利用価値の高いと考えられる耐寒性の強い種、耐塩性の強い種、休眠の浅い種、無限花序(四季成性)など優れた形質を有する種の存在が明らかとなった。また、興味本意にブドウの中で最も長い房を形成するネヘレスコールと最も短いエビヅルとを交配したところ、得られたF₁は中間型の形質を示し、かつ両性花で、四季成性でもあった。最近、野生種を親にした数種の品種が作出されているが、将来さらに野生ブドウの優良形質が導入された多くの生食用あるいはワイン用品種が作出されることを願っている。

(千葉大学園芸学部・教授)